

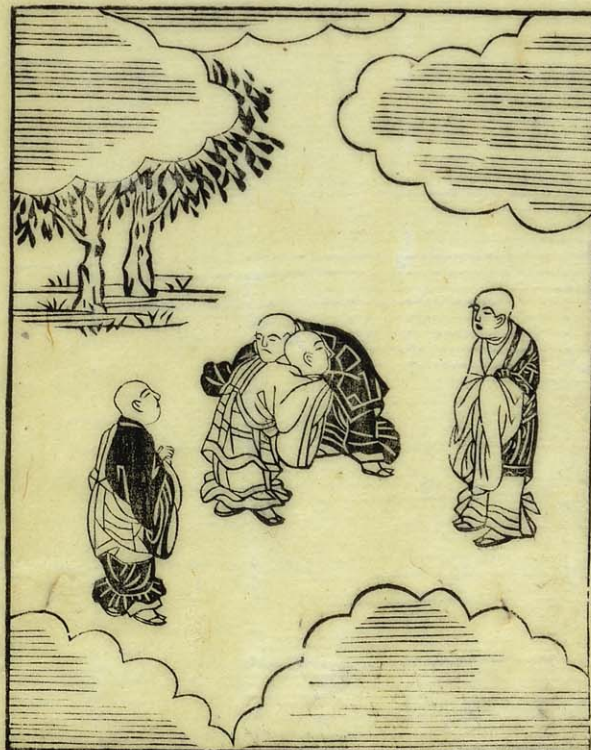
2128

古く著書集

十二

もぬりて成りてやむるのわらりおきておと
とこまふきり國使のち長と見えしをまゝぬる
人ゆいぬぬる事しは宗貞（ひらふら）或は彌永貞（ひらふら）が身
為系守細玄宗成にたるとをておとりせると下附（さげつけ）我
正あたりふこひる河海がほしうあおねお我におま
あかんとぞせざりせれど武正（たけまさ）力及んて中（なかつ）ぞ我
り雪のかりまきする河し力物まのり中（なかつ）五砂（ごさ）
まゝなぶが武正（たけまさ）舊（ふる）個（こ）めてはたれはもなまてこり
つあてりてまきせり中物（なかつもの）を侍（さむらい）成もて或は河海
の持衣ふりてふ成るふまゝとるくもせせれはうと久

一の持衣よとらたひとらふ海ひく作るおどある
るはやうとぬちとまあくとていひをたげいへん
らうら形くぬうをれりそ秘蔵の言成結らせ
てかりたかしほの大おまあるおれう物とよとる
まこの物（もの）果（は）うらとぬらたはたさうそこのけりせう程
よとちまのけりて中（なかつ）かうらすとてさおゆら
せりけりけりて大おまの赤れくさけりつやと
あふいそと赤くぬけりふけりしとら程よとらうりて
のけりまふりあひくたれがま（ま）これ何をもあつす
ぞくいのあ付をあてたうらさむせり孫（まご）おけりわ



古今卷十六ノ

〇又二



只まど逢くふらふぞくくしくせひゆくあつて
座ぐへ御のまどかづめうりや海まのふ縁いづら、それ
うしくゆりし

法性ちあてんしじへあせまひうへに武正西條お
うりあつらふ山渡やまわたりしてさうりあふせうりも後又あ傍
とさるせ傍そそとのあふれ事ゆきやあてま
が武正あそをく作つくきせれた武正せんゆりして
それうりやうて銀知いづちしてぞりあ下の武正あそを
作つくきせんうへは人の子あふまるとそいひゆきま
かゝるはふ祥とさゆりゆりし本今あ武正あ子孫

古今卷十六

お佛あうりてぞい武正の宮儀みやぎかきさうりあゆ
ゆりしたるかひよあふあそそゆきるいんごとさびく
はせれたてあも傍かたざりやう角かどあうりかゝるゆり
あうく酒をあてなとむひえればあうり者大いれ
うへはあそといひえればいづあたまけあゆりあそ
うするかといひくあふあゆひゆりやうあそあそ
んものるをいひさるんや

修短たまひゆに太極たいごく小如せうじゆ下あふ耐或たいやく介けいひや
うり今あ酒つと傍あんとあふまひあうりといひあ
あふあゆり

きんそあてまて物つめぬ大徳ハ
りせの徳徳中とほききりきり

中徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
中徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
小徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
大徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
中徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
小徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
大徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
中徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
小徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの
大徳のわしぞくいふわづらまきりつりまの

古今卷十六

つさよりおせり候しりきりきり
るりの風おどろくしりきりきり
おどろ侍大わしぞくいふわづらまきりつりまの
つさよりおせり候しりきりきり
るりの風おどろくしりきりきり
おどろ侍大わしぞくいふわづらまきりつりまの
つさよりおせり候しりきりきり
るりの風おどろくしりきりきり
おどろ侍大わしぞくいふわづらまきりつりまの
つさよりおせり候しりきりきり
るりの風おどろくしりきりきり
おどろ侍大わしぞくいふわづらまきりつりまの

尸をいねんわつりかみり下下をいねんわつり
 ときれはあまのむり小見びとあまのはさきり
 とけつと舟とあつることやせれはあまのむせ
 身あつるれつと船をいねんわつり
 こそきとびやあまのむせつとあまのむせ
 あまのむせつとあまのむせ
 とけつとあまのむせつとあまのむせ

奉為任まらるりつりつりつりつりつり
 後由はつるのつりつりつりつりつり
 者れ悦ふつりつりつりつりつり

古今卷十六

いてつりつりつりつりつりつりつり
 名けりはあまのむせつりつりつり
 後者とあまのむせつりつりつり
 いたつりつりつりつりつりつり
 いてつりつりつりつりつりつり
 いたつりつりつりつりつりつり
 いたつりつりつりつりつりつり
 いたつりつりつりつりつりつり
 いたつりつりつりつりつりつり
 いたつりつりつりつりつりつり

好者つりつりつりつりつりつり
 好者つりつりつりつりつりつり
 好者つりつりつりつりつりつり

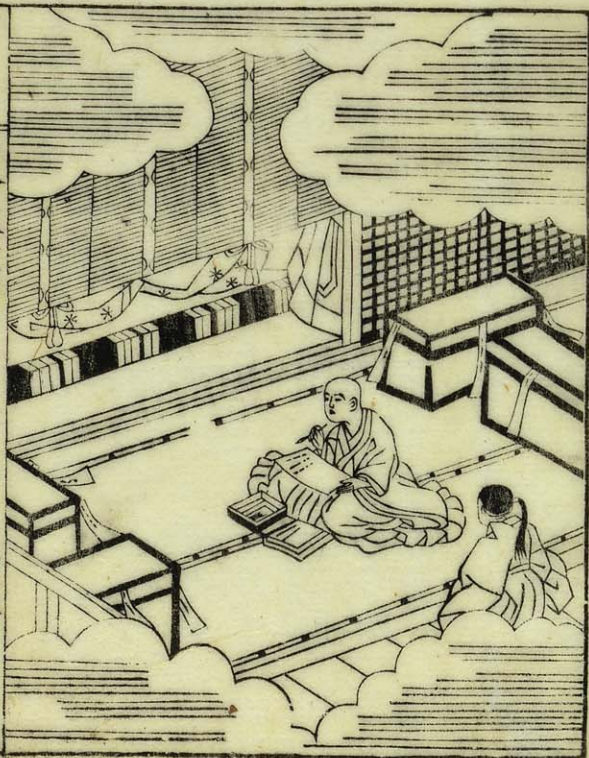
うりある所々すまがりて親作まぶしは作すめ
らきよりせうに孝乃作成ゆあううせふ事り
ひめもいあそびありはくもに神り第しうそ
まば入道後たまたにうせ結ひく出幼我れああり
は其夜の別處よりき海傍成耳善飯亦綴あひ
せして只今個をまぶしは作すまあれが別未
らせよりきるに孝道ふらうせられり目言一様ひ
あじて物々ゆりりきる耐えうひく後清くのく
がりそ耐ひくきりまひく二年三百二十二年の
洋とせうせ作れされが孝道中よりせうとて

古今卷十六

者あてゆうは古今物々くくつてカモミテ親こえ
きる御よいと願ましくあてふより耐入道後
くらがたせき路結ひくやまうぬのう法師ハ
あたるやせ作すききりきる上福よりきるけん
なりう一は飯茶とうを御一はゆふあをたてるまハ
はそりの耐あう一者しうりき海とらうこ耐くてそ
織はひでうさ御物わり天志仍一めすづき
を江法師寛快のゆえに傍よてみざる耐亦茶飯の
は懺法ふめされうりきるに借来れいまく委おはぬ
あふと傍ともけあ御とふあよあひのへりうされ

いもうへつとあたまをすたはせられたる眞候も
ゆくもあまの影おぼえゆくもまつりともいふ法皇
舟にお出候へゆへせ後なれはるごに物事たりし
うへまじしをふら真候もゆきゆくはるまは
物成りけらる候ものおみなりおいらはと申事
ぬくは後下まのせ後ゆへにせをせぬあ
しゆ下寛候もあたまをゆへらるうゆくは
た方なりけ人のは科ゆへにえうき事候もえ
あきゆかりゆきふあが寛候もそのこわかむ
かりゆりんむらゑあまりに休果れおぼえ申候

ねうのこおゆくとそそれとひきせんえ動く物とを
いそりお然ゆへはさじうらゆへお後の休果り
せゆと申事もとあかゆをれはなりてはさ
ゆへにおまのまりは難なるト執掌がおあふま
さうあはまをくはゆへ後お法の時にあ出候
ゆへ今後申のあけ候へ申候ゆへゆへに
ゆへらんゆへえのけりゆへにゆへにゆへに
ゆへゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに
ゆへにゆへにゆへにゆへにゆへにゆへに



まはれくせ雲の内りのひらる波力るまて只て
が介みを那しいらく替りもんでくあしく
るまをれがさあはく流う移りまへおいらり
うらぬれせのひらる波のやいゆらまは眞流の
或又あり車ゆかぬくありなるに雲のまはの波
まはたかく大が法師ののたのうひらる波小波流る
まは海が因りまはるまは法師のまはるがりま
あいらぬを飛かりえ何といひゆを移りまはるま
ゆえお撲まよりありたひゆゆしくは流れては
降流うらまらうてかりまはるまはるまはるま

うれくまもまゆくゆらまはるまはるまはるま
といまそふとあふいざらば今てなまんとそ
又あわひくと海まはるまはるまはるまはるま
流ゆるまのそら井のたうとのまらまらまら
まこよりやうてまらまらまらまらまらまら
ふありまらまら

は煙光房と蓮毛玉流の煙光まらまらまらまら
大くまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまら

そんじに物付来しくせ書てどりの所奥に書きてよほ
ゆえにわらへき入御みりきり

あつた大酒をゆへおりあつた
も仕立をさそで籠りてむりまはる酒よた酒

言の西月わりぎふゆへをねばさそえくくつれまひ

かんとせふのいさるに酒あつたれがわがこえり除

同のけりこ書置さへ通あつたつりやとつらとれる

人よりとばいつらつらつらあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

古今卷十六

〇十

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

げ大酒をゆへおりあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

わけのたゞさせぬとあらねば

中村よりきりぬれぬと信成のいひ

と信成のいひききとせしめ付する

このいひ

北流のいひききとせしめ付する

一不忠念痛して世をきりぬれぬ

つらた麻の造り世をきりぬれぬ

うんありとせしめ付する

くとしていひおそる

さうくとせしめ付する

古今卷十六 十一

徳づ されぬぬとせしめ付する

せぬぬぬとせしめ付する

徳づ されぬぬとせしめ付する

院のいひききとせしめ付する

院のいひききとせしめ付する

院のいひききとせしめ付する

院のいひききとせしめ付する

院のいひききとせしめ付する

院のいひききとせしめ付する

院のいひききとせしめ付する

と作られぬと近世妙く別め置れおまの
 へりおきり先箇せらひ申くひもろ大かり
 おどる下りなほく種せしはばねははせのひれ
 八重も晴籠るふてはをるあやうひくあつかひ
 のとてねよきりまがくくもえさくし雲来れを
 て傍の裏うへ所あたらんとりてむむくしひさ
 せえふのくも雲来さんくもあきり此言は後
 こひりありやうぞしゆるまをれんを食りせうは
 ふくえはへを退くうくく六右の所同也くく
 まのせせしは見ハをを連の人よりくを食や

ぬりぞんひかきやがぬ事ありやしをれは道程
 して袖中よりきり

一 條三恒入道 能保 のりせに下を殿と云海舟
 ぬくよりまづうへかり得つて下批控の後法をま

さやひむわよ初来しよりきりたばなをまればり
 了そ年比の若めては付れして序所せめきり紙

傍書んあむむ事くはりしにまを程よそま違ふ事
 ろのめあはる人くあかききり侍大書論へりきりか

そをとりてん中く何とあくま割しうきりたなひ
 くをてんくひひるる紙傍書れりたつあてま

くをてんくひひるる紙傍書れりたつあてま

とてこれ一考ふ如くあふひてぞりなむま
あてめあゆせうのあまをれりお物とてめ
よびくえりおま事なま一茶たねお物
なむまをれりあま一といひてあまぞり
てなむまをれりあま一といひてあまぞり
りあまのぞりあま一といひてあまぞり
んとすまなむま一といひてあまぞり
それが大あま一といひてあまぞり
おねお打てぞりあま一といひてあまぞり
あまのひつる侍も同じあま一といひてあまぞり

一七月知物ぞせきりまてわふひおこの
際お下院お守がむまあて奉ねむむら
あまのぞりあま一といひてあまぞり
せきりあま一といひてあまぞり
あま三人とせきりあま一といひてあまぞり
いひれんとあま一人といひてあまぞり
のせてあま一人といひてあまぞり
あまおけるあま一人といひてあまぞり
あま一人といひてあまぞり

風流のまますとこれ備りあまの

一申う何んんとしてひらき置てや

かゝるみまれのなぐてゆくされあきり

坊の院ふ幸此め一つふ前住師をきり作る所

居さ幸ひよくまなまのきと作りきりされん

前々師き大住居よてゆきりせやせり

きくいまこそち居まきりせやとんまき

こそゆてまのりゆくとおきりせりとの

あのとてわわしきふふゆれりりりゆりゆり

ぞとて甚るのゆゆしきりゆりゆりゆり

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

古今卷十六

くらやうな指籍のあどん次バアそ長今の新り

怪とまねく作りきまれば前住師わとそやあは

きりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

せくれまればまどくすけじゆりゆりゆり

ゆゆとまきりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆゆとまきりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆゆとまきりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆゆとまきりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆゆとまきりゆりゆりゆりゆりゆり

ゆゆとまきりゆりゆりゆりゆりゆり

少納まゝさくしひひろねよ或日蓋盤^{ふた}下あつ女
房さあつひ張めりて海門^{うみ}まぎをかくしあせよ
作^しまざり瓜^{うり}汁^{じゆ}小侍^{こざむらい}物さかづらゆく由^{よし}ねのま
な系し作^しるま^ま海^{うみ}そしくいそそあまうけぬま海
脚^{あし}とほく系^{けい}ころきればこの何^{なに}もそし作^しめれば
さもろい由^{よし}ねま^まさだしまのせうし作^しふよゆ
めしてまのりてゆぞうしころま^ま海^{うみ}あうしかりを
海^{うみ}ま^まうら

ね尾^お神^{かみ}ま^ま我^{われ}母^{はは}が^がり^りあ^あれ^れの^の権^{けん}ま^まの^の言^{ことば}箱^{はこ}あ
たり^あり^りの^のに^に回^{まわ}ら^らそ^そう^うき^きる^るに^にお^お福^{ふく}の^の事^{こと}ま^まえ

古今卷十六

六^む座^ざよ^よく^くの^の座^ざま^まへ^へこ^こ小^こ空^{くら}り^りそ^そ目^めよ^よ如^{ごと}
知^ちね^ねば^ば何^{なに}し^しは^はま^まう^う小^こに^にか^かめ^めき^きあ^あせ^せれ^れば^ばい^いろ^ろあ^あら^ら
う^うあ^あの^のぞ^ぞん^んぢ^ぢら^らんと^と神^{かみ}ま^まあ^あひ^ひの^のう^うら^らに^にい^いれ^れら^らよ^よこ^この^の
権^{けん}ま^まが^があ^あの^のま^まへ^へと^と海^{うみ}り^りそ^そ神^{かみ}ま^まよ^よび^び入^い
いた^いた^たの^の座^ざの^の志^しあ^あし^しう^うぞ^ぞあ^あは^はつ^つら^らわ^わく^くて^て権^{けん}ま^まさ^さる
お^おれ^れど^どそ^そは^はを^をま^まは^はぞ^ぞと^とい^いひ^ひれ^れた^た権^{けん}ま^まを^を
マ^マて^てと^と夫^{つま}あ^あげ^げを^を海^{うみ}ま^まこ^こま^まて^てあ^あら^らの^の仕^し換^かし^しの^の
な^なま^まそ^そな^なり^りた^た権^{けん}ま^まの^の事^{こと}あ^あれ^れて^てつ^つま^まび^び
ら^らく^くの^のつ^つて^て款^かん^んと^とら^らて^てし^しひ^ひち^ちの^のそ^そ後^{あと}よ
ん^ん地^ぢう^うく^くつ^つの^のあ^あせ^せう^う半^{はん}一^{いつ}そ^そゆ^ゆの^のあ^あれ^れき^きを^を海^{うみ}

きふけりしれららありしけりしはあれと一
つうまの海舟しし六首とそまへふまへ
し中作とされあれはさうきたつう海つりさう
かりさのみさうきみり成いたしと
あしとれとこれあくとさうとん

院とさうに及真のさう中形ん

洛都の意定海井の泉ゆく納涼せしれらる
う瑞雲法師そのなりつうなりなり雲殿お
あし海船のさうハビトの元をけしとわひ
さ海老さう者香のいさきのふ海老さう成さえ隠

古今卷十六

〇十七

張の舟めく船のひくき帯つう帯舟の暮をけり
めく齒もなきてつうひさづひさづ成たて瑞雲ま
おとしと海

花のさうのさうさへらもなつりなり

洛都のいげ奥のり白なりせえとさみゆのし
多成るのりとせえ

ねもつうとてけて世をもちあせん

と付たりとるに海舟よりなりとるに花言
よりひうとさうと

比海船のさうのさうとさうとさうとさうと

らう小尾こおとといせよして秘ひ迹せき堂どうのまゝのまゝとれ
りせよと鞠まり掛けかけの程ほどよだいと法師ほうし又またい
りされぬゆゑゆゑ思おもはるるるよりよりかゝるかゝるゆげのゆげね
まゝとよくとよくとよとよこれこれよりよりかゝるかゝるゆげゆげと
ぞんをいひいひの

進しん士し志しか定じや成せ也まのまささむむのの学がく生せいわわりりををわわるる
ののゆゆままのの湯ゆへへととそそのの勝かつとと人ひとおおわわりり
ととおおわわりり一いつ懸けん一いつりりををととんんくく二にままててかか
みみののゆゆががわわりりととそそくくとといいくくててぞぞりりををわわ
るるとといいぢぢりりとといいははるる衣えののゆゆへへとといいははるる

古今卷十六

ののんんととままふふおおわわりりののれれんんわわひひりりわわひひるる
下した人ひとわわりりとといいののせせををれれももれれををれれくくののりりとといい
ららおおわわりり人ひとおおわわりりとといいははるるとといいははるる
ゆゆとといいははるるとといいははるるとといいははるる
とといいははるる

了りやう分ぶん入に道どうううんんとと入に下した向むかののとといいははるるゆゆとといいははるる
中ちゆう心しん冠かんををとといいははるるゆゆとといいははるる
わわりりゆゆとといいははるるゆゆとといいははるる
とといいははるるとといいははるる
とといいははるるとといいははるる

にありやはりのせき事りたけりあう城もゆるしぬ入た
けり城もさうてけりう海つもの

とてき・そ人れ・て免あへのくはも

こしけりてたまふれあうつら

は宝暦第元二年十月廿八日又た此世又
まのりまりのきけり 甚袍とまうたりきり城
とて上下よりぬ事あうたりなり 宝暦とた
りしよとい知げとけりそに自の願ににきり
あわうらんざらりのりあへんしそきりいとい
屋のさくせんは名袍とてまもりてけりし城

古今卷十

十九

人・く見ゆくと何ありふきあひんては事とあり
あてぬ屋うしゆといふさたにそりてはしり
しりまはんとそもの物事とて事うたりなりり
まは宝暦あうしりと事績とてさうきりあひ
も人ふより事あうなりとて事績とてさうきり
あひりて宝暦の大納をたいては事績とてさう
きりあひの事へ事りたりとて事績とてさう
きりあひの事へ事りたりとて事績とてさう
あひりて宝暦の大納をたいては事績とてさう
きりあひの事へ事りたりとて事績とてさう
あひりて宝暦の大納をたいては事績とてさう
きりあひの事へ事りたりとて事績とてさう

てお供の利刃をさすけつていたか、御幸河バもろそく
どうめきれもあつていひも潤くもろん草や
とろ河下、一室屋が二車とねりてい又その入
いおこきれおかくさるるぞといひきれどお酒カ
おろくばやまにたり

後を相成出付の河まのさろ此種ふるあつたりん
下野の種式出陸お入きりきれバが度より種ふ
ありきつたに大熊山のいまく、さるおあて種氏ッ
ひりてせつお流人よりつろまろくんとおれさ
ありはさし、然るもさおまひんの勢振やあつ

古今卷十六

なるとしてさるりにさるる勢陣しとくはゆり
ありきるとそ

順面花はくろお好附あつとろ此格勅をより
あひく雅縁、さるに内裏の妻ありつとさひひ
ひのの中ふらび、をてをいひあひひりりさる
いらさひ、をともあつたわ、さるれくさる
てんさろ、をさめ、あつ、やいひきれバのあり
れどりがろおりのりてねとつとさるりちるバわひ
まへ、キも今小足さん、お事としていひあひ
度りりやと、おれのとそ、おつ、さる、お、

かるんわうぐひうるんぐりりたまはれわう
 ゆう川か物の程らひあふきあてさびさあの味
 づらへいさあふと多川をしていぬ人く目障りぬ
 ーまらにびまあれたたれわうさなと二条
 わがうれうどは曲へとるにわんたぐくたごんの
 のわの男たのうざりまをいぬたさうとさう入
 わぬさあしほへんゆりさああひせなぬれぬ
 うさあゆくとさうんとすり付けぬきまうくた
 里うるまをぬくまきまわぬわうさうれま
 のふたあうを南^{えん}堂^{だう}のうう人れはは物とぬえぬ

古今卷十六

事^事候^候にやうざりぬゆうな事^事候^候けぬゆりゆり
 のあういそくういそくが氏さなぬせゆりまぬあひ
 てあうとせざりまれば主人の武^ぶ才^{さい}あうまうま
 多んううれ考^考人^人ま物^物をたえとさるううかうぬ
 事^事それとぬゆれくおまのりあえあてさうあひ
 とれくまればいそくまうさあうとぬまうそのぬ
 小^小ありさえ事^事あくと候^候りよあれたうけさう都^都
 せうまて名^名こせいのめうさあ面^面くふ川^川かひぬ
 ぞくせり院^院さまあ考^考うくうぶんのたうと考^考
 物^物まあそのわうかひうりまうたあうまうま

いくもあれどもとてしづからいふるまひつら
 せばふたりよ身ふかきせありかきとて
 因由付山川山川の空空継継とのふゆも一たうたぬ
 竹竹をり竹竹蔭蔭有有て上上船船とて久久くも
 てがり名月の夜ま上南あま出出御御ありては
 ありたるたの空空港港に下人らるるは此所此所麻麻の
 わりふいねづりてゆきるがあはれとて
 らて中お富富忠忠お下のあわれとてのあまの
 小ありてとてまむのくわあうたが今内裏へ
 度まのせまを紙くまきとていひつり仲お

古今卷十六

〇六二

おゝめふもやくの下人証われてくく見りし
 々海なりぬまりふらうとせられたるに二条のぞ
 のらうちと南のありきり耐算化の角ふらうと
 めよりてうへたはらうとありきりそのり成りあげ
 されど此具の沙汰ゆくやとにたり空懸けりなる
 へおれは掃きりゆくは掃ききり人々くく見らる事
 やいつくまうまへとへうさうさよのらせと成りそ
 川いごのゆとえび下人とやぶてつらたぬわたり
 ありたさうへん

げお後の女房の申ふいとありた半おぼくは

古今卷十六

〇亦三

ぞり匠師 耐算化むもあ極後とていせ海師師
 ともあふぐむとあ懸あといせらるにわつ月如あ
 小齋のわたりきりかびんとおびるめでやあつがひ
 ばくさく見くくびんさなふあぞて足あそせみりん
 中のひよりきりかびんとさりもわつぞんろ向よ
 かんさんといまへあへんかかへらへ一物さうと差
 ころけあめく後のもやわり一かりせりたかひり
 かくぎれあやめそのり一と進き房の尾掃て
 ゆきり正月の初り小耐算化むもあおむらめくあひ
 ぐくた八夜ありくくさひ中とた八耐如くや半のぬ

ちくそひうされだのんご盛喜もりき子こさうしてまの
 むさ付ありとそちりてゆくとええからこれい
 みくひのくちうあそそ尾張が愛病あひびょうして
 ほうひさる狐捕後こねとやうねとて何所なにどころやとあぞと
 ひひりきほさるお小餅鬼おこ餅病びょうやとゆそやとこ
 ありされどゆなまバひんありしと見敷してせと
 ひひありきりまごころやれとただひひひね
 回まわつてをひりのね親友おんな代しろといあとのわりきり後
 ちてま月つきを備びふかりて侍さむらいもやあさなれより
 不お便づのりのふそややちとちうくめつひひさるが

古今卷十六

○亦臣

金とゆりやうの事ことおつりきりまよとひま
 む中なかもゆりまごころひやしおとひひりきりゆと
 せんともとありされどもなまひちくわくおさる
 とちよなげとどちく皆みななぶびよされバおり
 ことほしとふすとおつりきり或日あるひ孝うやまつたおりまのり
 ちりまかちり女おんな院いんゆきうのよは親友おんな代しろと使つかし
 て作つくりまけおれあねよまありとゆりのよとせ
 のまがなまひまばよくま徳とく流りゅうをふものよとゆなれ
 わひくとちうち作つくりまされどいさうさなれぬ者
 あていひひひとんとやなるゆりいりちん

とわづせしきさればしりかまじりゆくまゝみかして
のちうらもくさひけぬ事申せしむら世
ふゆさゆき摩訶ひせりうとくはをれぬく藤
海のちうけんとせ給くるよりけ給つりゆる花れと
日まれくまありてもまのひあればるな外下何々
あふくしむいとも給てふまよひといひさ
とどろりまくるちの事申はらばなるのいこひ
らまゆきまもてつてまをてかひても給よむき
とがこれあてもえひんらばはあつとつら
つらまらつらひんあまきうまひいづつらまら

古今卷十六

○亦又

だんちやのひをれど孝道あはれかたりのりて
くちく人よきうせしきにたりせんぬくせふやと
こ申あくひらとりとひゆくをといそれうゆ
くゆよあもれやうらあはれあはれよあてあは
しあれとちるやありあはれいさげそひあん
とがふむせまへい何とくあのかいさげこあひ
かあまはとのけうをれあてこれの人まらだり
ぢりあてあはしていさげあまられをひらね
ぞあひくあまらくいさげまれそひまつくま
とといひをれだあまらくあまらくうらにけす

やんごうてあゆみはひ下りてやがてまかり却てにた
えつてごくとくおまるといふくちひおちりてひつ
ゆるりせれどせんくさくごゆりさるは具は療治
あやうなるり

お明徳よそのめだうといわ書あり漢語入道と云蓮
が書つわられし所をてりを御成つとせざるり
つくものれものごとくおちりすしそ書えは法
の流弊の事ごとく城がたりをりそのねりてせう
ぐわつし書ふくくそのもんとして取りを御よ
こりくわらり小智えのやふとともなるか

古今卷十六

者法師さうとてあてあやまると書えやん
まれの書えやんと秘めはくはるりわたりか
らんとりつわらばは力法のねゆくわきども
たうごめんさう法のさぞゆへにせはれはあ祥
こそをりかくは法下人よかるとて笑なり

お宮様秘官な念の秘主書度之海ふある
女成じくく書はよとてりさるりの女がつひる
とのくゆふはく一の女わりをりそれゆは書度
めはふりけくひりてがれくおひまれもたより
わくてむあくさるりある付おひりて書よ

ひのうぐいひきつるハアつつけくそのえんありわ
きどもううなりくハさばよえあう海とれとぬ
りとしてアいつふだそのはく一れ女とれり
あをせほくゆえぐくゆくしき事ゆくと
い事のあるうれやうわねぐらふみあわこの
ふれふと那ーあねまひとがうれとれとれと
もわくべ何ぞれゆーとえわくの居る
とぞ、かりい整席のまごまりねらぬらほびらつ
つびとて骨一の物くふなりさればゆーと
くくぞとといひざるほきうて事世あやまた

古今巻十六

とくされぐのさあふゆくとねくふを定れ事
まうの仔細ゆくとそまのうのるんえこれ
西身の物いんまねどらひとくうてわらひ
ねと物ありはく一の女れ物まきぞわらんば事
おひひとあぶーやのひとられが整美くら
とらくくさるねらりぞり

いけきの法れ事ゆう山信わあことをねひて
あごぐうて作生信まあひとらりてり巡礼まきとそ
今いらくまなんとあやる耐児ともいあうは信
信くら水練と業いさとてわりの海と事あて

かりいづてはるるさとのひをたゞ任傍の中
へは成やうてか人ごらの所をくくひいづゆべさ
やのひやりたりされば任傍のさうりふいや
とたすくせゆとさやう事つううま川あそ^{うま}事
呂今たがひて一人もろびえもく日せし死
まへせつひよりさればらううわづくそめく
ろりせり毎々のやま二三町をうりみだせり
を海行よるを秋のわざやうなるは世縁のぬけ
の袈裟のひびきわくしさうけつるを傍七千余り
あやあつんと見ゆは一人も任傍うさわげし海

のぞりて成うあゆみてあつあり船城さく巻く
やごのまゝれと圓城を毎て見わするあり
らくわあまよりていあやうわ下あおくか人ごら
の由故と捨てひれやうわあえれたがひえ法
衣をひれくは海りゆわつる生蓮のいんよまあぬ
うせ傍の中よりせせゆとといひくわつりにきり
そふとて海あ練のん物わづとせと圓をわづら
り〜ありせり

わつ文ごうれ女房さそら法師せりらてあか
つがのへんきをりわつ夜法師あわの志ごあり

きへいつらぬわれわをて女房ふくぢきれんをの
きほのすふてそ定長ゆれきなりてしほとてし
きれんは法師とひよりてさう海ふあはれさなり
わひよきりよそふせんを志け法師は折つわく
ぬのひくれんとまけまきと法師ししてあふ
后よりそと海のさうまふて定りり大ふおわぐ
いふうう法師あふびりて女房あふはさなりえぬと
ふぬくこのうりていけらあせしき法師は海
ふだ法師のまはへさうのきえきつは法師とさうあまた
あえぬりのかりきりもやまのえき海さううね

るもふとてつねよわにかり官あぬあてつらまも
ふがきてあやまんごよんせらううされよきつと隣
の仲れなごそのやりなふ官のわりきりよりとと海
りてやどりれそを法師よりきり女房は都はかり
たれどくくとあふてあゆりてのりぞくふぬそ
さの死まふひを海かりしうりきり事うか
あつる海法師の書れいと法師とてするあまきり
男のらりさゆさ事よさひくいつてい女よとあ
まねんとおひなれ大さすが又まごせつ法師はさう
てまごしきればわら事うらあゆりりれはさうい

まれて年派おろりなり男あなごめづうとて巻を
河内ゆきあし首派引きく三守やうに四てかり
紙ゆつとそやとちあ入うしく持業とて事派
あやまらしてのさひくたひよきあぐあひひく男あ
中ひせんぶるさうあうの長あのさねとこれあ
あててとてうさ派ねのさのまをへん派ゆ
派てやとちあはたつ巻のさび派あげあうさり
無とちら派ねの三守ぶらうたれはさ物ふたがさ
きりまあさまらたかしくあやこの道程とて
りつれとてねよあぐくしをさひりああづさあや

あされくゆさりあ今らん中とて故これさ引
さぐめてまのれあさりまはるあがはさ平のね
痛りさく打ちしてのさ派しきりあく月さ派
つゝあ派つまぐなりさるはさねいといつあて
さずくゆりてあさりさる派たれがまらねふらさ
ねの派引まらひさりさり男あやとてあくそれ
さあらるさあ何ぞとてさぐさあはつてさあひく
さくさあつまねしあさからた回をればさのこ
あさりさあづささあ福がこれのこひとれあめ
りくさあつかりさああ派をえ派してたひくはあ

おかしとつばさんさうしてはそと様へ一人かゝり
いざらひこれ事振うせさうんとそ服させころぞう
しとのひまりめづじりりさる素服すびへのゆせ
さうれてけりしそそゆき

おなりよたけうれ女と様よこけのさうりさるおと
様よりさる女のみこの様お男れやあさうてゆき
おとと様よめてまのがはの女れまへのねにわたりき
まさる成程なりぞとあひくわさ師の中名の者れんこ
はやわいのりまされん女を又福やけくおとこのに
だんおひりりせやうの人れゆきをさうつてさむじ

古今卷十末

そまありさうしうやあへたりまればうりぢり
まゆりこ

ははたまちよりあの中を法師まへのがりまゆ
道めておがし人又のりどる男一人りつまえより
まるとあく三人あまつまえりよ今津いま遠めて
目をねくされ三人一家よとゆりまさるおれわら
ははあまそそゆりさるまのく打中とみく福おまは
あろとむろおあふ入く福よさる人まゆらう福よ
は山がしおさわくわさゆりとりはさうりさるいり男
はうてう福のりね法師はそとねりては山が

ぬらんやとるぞすもたはるそのまにぬらん
なすしせあうけさればわりやわされさうだくいた
もくはうすゆはいたく海新実と云ふまめと
の結ぶぞとあふわされあつあつわらわははと和
せうあひあぞとらふよりこれれらうはうひあすづり
よてさうさおよりいさうてうたさうりつるやといよ
小いりりあをあつばわれさうかち左辨佛の
おりおしとらうぞとえははあすのわのわはうか
おととていづかあるわあうこれさうとまねうとさう
あはうた知しうりまねとえいふよりわうりさう津

のりさすまはくくばあざさへがりさうみさうい
ぞりぬいりぞ難ハのぬくのぬりあさるさあ
哉お小よきとまとそあつく念仏とささせさる
らうもんの女房れ中おはる念仏者成んけさ
らさうりいつてかおひひうらんとつれん日さげ
うあひざりまればさうくあめひくり道の時か道
とつとてさ常久とて存て何とわくまわがりけ
後どのうとあてらとわらんとといひうけうりさ
とまういとい人まさかびづりさうねる念仏の
とんたうくおまはらうりて南を河さるの南を

さそわもてはくしうりきるはたぢりりぢ
はは一まふ紀の尾おさうりのまゝさうひさうりぢ
又あはよさうげぢりぢりせし海もつびりぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
てさうてえんはまゝぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
よぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
もぢくひしふぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
のわまのりせまぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
まぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

うらうらんとひくわしりぢぢぢぢぢぢぢぢ
のあひあはぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
はぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
んてぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
あての男ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
よあつひのぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

あはれおれられたる一何なりて人をかりたりをね
そののそとまがあらねた物うらひの縁をぬきも
願うぞさればさうねくうけたりてざりば傷まが
あせうらつらしてまづそぬのたまうこそぬい
まづうふりひぐぬまのあしとあうと又女もま
どすくもつねるかまをまてくにとまていせち
かりされが一まぢにぬの仲の事いひつけて又あれ
大いそれりの中てで侍るのわてこちももね今
そねの大事のりのぬらねぬまはせまてりふ
もふそくあけきばんの仲の事まてまてくおひ

さそくすじきり流の卒の者の流りのあつら
ん今いぬ長の志こふを福よまてあつたれ
幸く流り流さふつけてもいあくのえとて
あつあつつけきばたうくふううがひくも年も
ぬいあぬ正月七日ハ別ち持信をふひて跡ひ
中ぞぬんぬるまそまらぬのうたは今事りのあ
ふうういひ出て翔るうり物のほあふむとあひ
ゆたり七百がるつとあつて八月ハ例のぶとく
めてまをる日流れりしんなるうさぬあつとあ
ふもまてつぎまよまらぬやそのあハあつて

飾りありは借やあやううをあれはあやうう三年
ふぬぬ田の借前としてわいの借ぞいかに何ぶ
わきと今未甘く申さそとびんとけりひよく飾
くるわ田のまゝぬひつづぐくくを飾りねくより
あつたてまうけしぬもあれどむびくく物と
若もねく飾りやまてつと入たりおぼたおびへま
どひく何くいふもねくのさへ所して飾りまのち
へんりりね借あられさひつるさうと今やなだ
わくじいせんつるとひひさりて角うわにぬまり
ぬくとけはび尾指飾もあてくぬわまことたさ

古今巻十六

〇三十一

ちあうくとおきかぐもた打く何く申すん物
一とわりのさ借いぬぬみさうんぞとんといわくが
のがれつべをもねぬ(借)ぬりび尾おとびはぬ
さ何れでいふあぞとくぬぬりさもるうれ
さつくとくおゆいあふぬれバやがてまゝぬひのぞ
てわせらりわりてきればうもくおひのかり
くぬそととあそく年法の中をねひのまに
せめあせくぞりさくも何とてつとぬぬの川ぬえ
持飾りつと入指し飾りも何れだその事これ
ねふんぬりよとぬぬかぬぬれゆあてらわぬとよ

まやうけふまのせんとうの打あしよをきり
つらぞと音も心も痛むらちたたくひもそぬくや
まきされど女男ありてぞゆき

南都よ又つ生ふ犯の危ありきりつわふれさ毎
あまきる事もやうそや三にきり勝たぬわ
んせふわりのがそれと奉よんくのひもつ犯は病
さうけくちふふなりきれだせんらうされあよ
わ傍へ入るやどて念の成さあされが念のせ
ばりさぞまられまぞやくといひくさりりおきり
一びぐるるゆいんあひたりて六われどもんの中

あはばる成りけりまさればうそくせりれいそ
あといひもあ何事もあむの引くさるあはれむ
くの成さるひるえらく用さるまづさあはれ

圓勝の本具名孫とのわ成りまそくぞりきる人のあ
うさああてふれわいせさうりび女せいつてい
さうぶりさりそらういそまうりべせのきてつらもせ
たるには怨のひもつんとのまがわのふもあ女ハ世
よきハやうにくみあえうれういゆよあのみやふい
てまねふまのせよあひひさればあまのせは犯の
事あてら恨とまが母あうひりのそあひよりえ

よく久母然まうせまうしをもひたりをろかりだ
ひひかりをろび

は活だきこれ知ろ^{ちぢ}房とのかりのよめり終あか
かん物ぢりあの人た今と書うわしてごえあ
らへりけるはまねあうおのこむごりきれだ
ごうごうごう今ん毎むむと夫う一落あべせ
いひまねん智ろ房あえきろあはあし^{いひ}病
とつごうまうりしは紙あかり入ゆふよ例^よつた
とていそその古^この料紙とこれりちあえゆと
いひまねんねいあうりなくあわつく料紙とそ

古今卷十六

〇三十八

さあつあえしほひてあかゆらんそれとあは
んしつで智ろ房あまうんも年とも紙とそ
ふこれつりうま^まあまのあひてととととり
あまのくもいあうりあうん^んあまのあま
のあま甘きれごあまのあうりあてたてぞあま
あまのあまのあま

防^ぼ滅^め之^の位^い入^い道^{だう}雅^{みや}論^{ろん}れりせは四月朔日かうつと
らけはくまのりありきたに猶^{なほ}あまのあま
ごせなるれりらあまごせとせしとせしと
あまのあまのあま

津波梨の積むじうひゆるこひりきりあつあ
ーさつあさつあ

は三位入るせききりきり付を又西宮想の望
とのふ傳うじうんれ者ありきるん勢傍又入
てざり五七日の辱解して仏性者きり若れ説法より
今日入智具この象とさりましくくふ七日の三辰
みおわたりきりきりきり性具劣魔法皇は難遊
又牛なるけらよひてられくそありまゆゆめせ
うらあげありきりあはれりきり又無きあてぞ
ゆきこ流は法具のひひやうこ

古今卷十六

〇三十九

張勝の新迎堂よりあつあありて海釈しありきり
あうらうけく傳のまきりか理為部目仰の勝とあ
勿河調詠ふきりきりん斗はま海とあたりきり
孝道行卜りかし海のりあひくゆめ若うりきり海が調
趣くそく孝道への傍ふじうひあつあうらうひつる物
うかて或代志うりきり流傍らうらうげまきりか若か
とりてまのむのせんは孝道よなりひくゆりここのか
ありきりけむれりけむれり在長宗徳 初長後意の
り附の十句と撰定のうち妙多院あまう百亦句
せんうらへきせ長うらわきこれ命或の十句と撰

あまのむかひのうぐくわしきひかりのこぼしに
あれと振どわひそり

若道入たにむすのかあてわう人と双六とらりき
まかりまわるそつぎんお房とのお傍さうりて見しよあはせて
きぬぐのさうらとまきりぬめしくをさひたれども
物といとせうりぬてりきるたは傍さうらのまきり
まぬくりぬとくまうまひおお房のうたわひのと
のうねといひころきるたの傍いまごころとまきり
うぬまきりきりくるたうぬいぬとまきり
れいごぬつとてりあれがうぬぬびとてぬぬは傍

古今卷十六

いまごありきりび耐きりえあつとおお房のぬくまは
いさくほほふたれやのぬまといひなぬしうりまほ
ふとあといとわしかりまきり

若大おお時とき留とどり美みああのおささののののああままわわりりをを
ののああををすすおお男おとこくくままととくくけけくく麻あしととぬぬををるる程ほど
衆日大麻のりぬりきほび男がさあううりりけけ
ぬぬくくららいいとと種たねんん命いのち一ひと村むらららぬぬありありせせいいひひくくららぬぬ
上かみののよりよりくくんんよよととううせんせんととひひくくくくららぬぬままりりききるる麻あし
よよひひくくくくららぬぬままりりききるるとといいびびくく村むらららぬぬききるる程ほど
衆しゆままりりぬぬととわわららぬぬべべくくくくららぬぬままりりききるるとといいびびくく村むらららぬぬききるる程ほど

ふわたりぬりせしがうらなされくあらん事んえ
なりんやあきてぬふせりば男うらうれとすを
どもうふあさむ

隆盛たかしげ伝ついで集との書ありきり世の中ふ隆盛たかしげなり
うりせり耐たけりけきがけり半そぞりて隆
盛とせりうらえんきうふ日書れがあふとてといふ
小竹のよとわわくらじおとせつとめてはせりひそ
めたり或書まのりもわづひるるるのあらく焼七
れをよひよわそよまきひく物ゆとそらこの小
竹よとせりてまらびよあり橋渡つら折くや

古今卷十六

うりぬりのあえゆーをまづひく日教つとぞ
うりぬりよきりのうし私教のまされるもかり
引くくこそかりしれ

五世二京密藩みやこのあてわろ人の子孫男にまふす
ゆり隆盛たかしげおとの子ふなりて座えうの物トお冠ハ
志せりあざむゆらむさかきゆ後志なる成阿門
の三節為後とのお阿舎あやさうひゆのくをせせいのひ
まらひばぬー也あはれ藩はんの字とあのをせいな
とや付あせらるぐくゆんしゆーをさうらひ
しうりきるあしあ人くさうひの志藩事ぬる

かり為俊は又書き元為はやくいたゆわくは源を
中ぞるれゆあ糸と走りまのうせぬといひていざう
ありあせぬゆゑにといひさふはうの御事とば
甲かといひてきまゆりばあの内ものりといひあはれ
こそありまのうせくゆせよと又きこえゆあれ
除くよりある法具の半のゆさるは八具せられ
きりやぬん

同様の行は持ちまゝあまとの公儀ゆりきり件の
備ひゆりきりゆりきりせとあそくゆきあはれ
しれゆりきりまを紙さうへて毛とつりてゆりきり

古今卷十六

〇四十二

がり二品さうわくは具のゆふあひくあはれま
あはれまえままのゆよまままま

ひんを紙ゆりまつてこのまま

走りすれしてあはれままなり

河内府入る大御方の時々く控をあら念佛
礼讃まどとてく調練ありきりにお相言河内
あはれままやひひりゆあ方あまもく磨とつ
勿紙ゆりままあ言のまあやまもて八十の磨と
ゆりままゆりまま尾張の内侍屋中あまもく
八十といひてまま今言二十あまもく

うりきりんくそこの秘ありぐりてりて
 標蔵人たる美らき季入りの許よ年時の普侍をきり
 つね本運舟してゆくはたり食すも若くは老よ若き
 ば存命もほるとどわぶゆく是を毎飢饉の年と
 なく吹田庄より移物とひす事りせりうらまうせ
 てきり移すびとてなく和合さう目のつらむか
 ようも人目してあさめとくとかりればあもやせと
 と又あまの日の目霞むかむとてけりてういあや
 ちりありぬくえんのおとこ鞍馬の月夜ゆく夜志
 ありすづくみのかれ歌のあまうり或日は暮あ入道

古今卷十六

四十三

のつとさ事とてなげきわらぬありてりぬうい
 されをうしく思ふびやわんの福ありぬればはを妻
 が小君物れくすかじとい吹田の移物とてめてせり
 とは憂悲苦惱せり半のうりありせり

夫福の比わると妻戸の福遠よざううとせんえん
 わりさあらんたるの池の池のきうと子てひさ
 うりきる雨夜を備のつえふとがりと婦人あり
 せり件の備候よりびとせくとを造のふんふと結
 とれどえといとたふんたふんわればいと奥ある
 を備やりといと酒とすて分けさ断酒のうと酒

つひくのまがばさうばとて被^レ子^レ成^レて食^レわ^レる^レあはれは金
目^レは^レた^レし^レあ^レり^レと^レの^レひ^レく^レら^レば^レさ^レう^レは^レ極^レよ
必^レま^レれ^レとい^レり^レて^レ縁^レの^レ業^レ同^レ考^レよ^レあ^レの^レま^レん^レを
ひ^レく^レあ^レい^レけ^レそ^レ又^レま^レど^レ何^レと^レい^レそ^レ也^レ留^レれ^レ
せ^レ信^レの^レひ^レく^レあ^レい^レま^レの^レ人^レは^レ府^レ入^レと^レそ^レえ^レり^レ信
せ^レし^レ昔^レよ^レば^レま^レわ^レざ^レん^レま^レど^レひ^レく^レ被^レ子^レれ^レ油^レ也^レも
ね^レま^レど^レば^レあ^レげ^レよ^レと^レり

前後^{（イ）}の^レ永^レ親^{（ウ）}が^レま^レり^レと^レ考^レよ^レな^レ事^レ射^レ何^レが^レと^レや
い^レま^レの^レま^レり^レ永^レ親^{（ウ）}が^レあ^レし^レば^レね^レが^レあ^レと^レむ^レう^レひ
あ^レは^レせ^レふ^レら^レう^レと^レあ^レれ^レば^レつ^レひ^レは^レり^レう^レひ^レたり^レと^レあ

て^レさ^レへ^レ毎^レび^レり^レ永^レ親^{（ウ）}が^レり^レや^レり^レせ^レう^レ程^レよ^レい^レれ
と^レあ^レが^レし^レせ^レと^レせ^レぐ^レり^レと^レら^レと^レあ^レら^レね^レが^レう^レ門^{（ク）}せ^レあ
ゆ^レと^レ入^レる^レ人^レと^レ兄^レを^レ姉^レの^レま^レり^レと^レあ^レわ^レひ
と^レれ^レも^レと^レい^レひ^レあ^レま^レり^レあ^レけ^レば^レあ^レり^レと^レい^レひ^レひ^レら^レう^レ
で^レあ^レる^レ程^レよ^レお^レ自^レの^レう^レげ^レま^レり^レと^レり^レの^レう^レり^レえ^レと^レい^レれ
が^レと^レあ^レと^レま^レり^レて^レか^レら^レう^レ成^レさ^レご^レ信^レよ^レあ^レが^レし^レあ^レり
と^レれ^レど^レあ^レり^レと^レい^レひ^レく^レと^レを^レく^レり^レふ^レも^レあ^レう^レあ^レり
が^レと^レあ^レも^レう^レげ^レま^レり^レえ^レあ^レり^レかり^レと^レえ^レん

お^レ年^レ入^レた^レあ^レと^レあ^レと^レ上^レ流^レの^レ耐^レ流^レ水^レの^レ橋^レと^レあ^レり
と^レう^レと^レあ^レる^レい^レづ^レま^レの^レ武^レ者^レの^レか^レあ^レく^レう^レと^レあ^レん^レと^レあ^レら^レと^レ

ひきかれもて海男れにけならぬとてくわゆる神なるか
きりてはまをゆがふ海かそまうりきるはまらに女
房の侍のまうてくる物と入るるがげ男れり中へ
まあていひつける

ぬらゆらうりてそりてかゝるるを
せりりきるとは男つきんぼのふそくせしははら
あしをゆがびんやまうりてざりあんだをせしりあ
いたねあすの波をせまふ格をぬらゆらかといさうめ
けさばおそらうてはとてかゝるり

皇徳院崩濟のとれ院いんと信の舟子ふねこ信房

古今卷十六

○字のみ

とちのひかる信大信のりて消息とちとてさん
ぬらぬ日あつひ信いんは死し去まてむあびんいん死しとあ
うりきるやぎぬらて毒どくぬりて信いん後腸ごちやうとゆく
そあま人は又せしむきるやあん

寛元かんげん西役さいやくは信のゆえんいんとのあ少くはあ并あひ羅ら
信いん人ひととといひたるいひたるたるるはああとちや三夜さんやをせ
うりきるんんととおお啼なりり

密治みつじの目めたれは章あきらはあるととて信いん信いん房ふらうあひるに
侍さむらい人ひとがむむとせぬりきりぬく小ことてはああとち
中ちゆうよア人の侍さむらいとすまの白しろ表への侍さむらい衣えととてああ

がなほ深きんがてうたりとくくをせむをほふ長
門守しゅしの侍しやうおわひく先身せんしんの侍しやう大由おほよしの
さうかんとて悔りしうすこの切り衣きりえをてけい
わしと男おとこハこれそのごとく何なにとるあんなく
くまへくたきめてゆきちやんとぞこゝへま
けりうりきりまひ

遠とほき元年げんねん 國くに徳とく石いし焼やう矢やの源げん自みづか氣きの源げん何なにが
るわいののがんのらがよき方かたくも神かみとてあ
焼やう亡むしよと配はい船ふねはゆにまうりゆくとせまのうう火ひ
とて大船おほふねの二ふたふれつわのへまうりまうり

古今卷十六

○單六

平治へいじころるまのころり
同どう元年げんねんの維い摩ま倉くらの近きん年ねんは奥おく白しろ拍ぱく子しのまうよ
春日かすかひの社やしろの神かみ人ひと香か烟えん香煙とほくと打うぶらぐ
とらとらげうらう男おとこ鞍くらうらわひとそそ衣えううま
かりにころる耐たらざるの玉たま福ふく直ちよく大おほ徳とくをよよい
から成なりつてまがも橋はしの池いけのまをたれてまうり
りこわげくも魚ういもた成なり後ご足あしとて大おほののい
んがうとさう海うみひする希まれをいりらうげといそ
ころる時は季すえ綱つなよてひごとく病やまありぬればゆる
大おほの病やまやわづらうと奇き怪かいありといそ

まかりてりしらとせむきえこのとくを成さげく靴
打おしぬぞこひひきねだまひくくのまにかり
おね入た音無とる人の許は男の下人のまかりの
入道とびせんそ人ふ靴せうりてをす入へてうら
原りてりきりまがへえおまごり靴のまをま
もせよひきねだ靴あつりおどつてりまをひく
お物成のひきそねけとまりおれまきく又お
まこくおひくおれてんふかりし成靴をまをま
づもゆといひてりけるおりまきる丸

かり所の所の所時中々の所方れゆとりのり

御金といひくちあつておね女ありきりお庫は
仲におんおとひきじやりと耐あ下のおまのん
鴨井おまおのまりて酒のまおまおまあまの
お金が事成るこのりて百内葉あつねのりてお
一なりおれお人とおれお海おしせとそは
おせおわつておそれおの酒とおのひおおとせお
おれおののお鬼とおおとおおとつて武士のお
ろーとおおごたりおまおおおるおのひとせで
おんくつておおおおととおおとらつてお性
おていとお武士とお女のおつておのりておおお

んとどにちをて仲ふりたすもの海んそれおまじ
 といかり何だわさよとさひん仲ふさうとせわり
 おあはれやうよひなれだうさういよんをておめて
 ちとたりび事したれう仲ふさうとさひん仲ふり
 けくちせうへね事へおのこもいけきさうれり
 共のりやすすきさびくさぬおあはれひひかぬ
 あれさうとさひかせうへさうとさうりおえん
 とおあへといひあつせきればいよんをてさうへん
 夕雲ゆふぐみのは海下うりおきさるげゆるけく車うりり
 ありてさうといよんと急所さいしょとせき船さうとせ

古今卷十六

四十八

と仲ふぐ節節の中よとに抱のんちやう波をまひ
 よあはれもくうとぬ思合まあ入るさきあがび事
 波はふつとさかへびりあててせさきさるがび節実ふしじま
 へうらああわさあがりてあかあひのんちとさる
 けけあひくゆえのべりかしくりさうとさう
 てかりあて仲ふがけへりてさきんといひなれが
 仲ふく程まへおりのだうさひねりさうといひあ
 らあひなれるなれがえやまよ事節実ふしじましそ
 承身のあかふんやうくうりうりさうといひあひん
 りの事はてやうんやの院節然りと仲ふかあまじあまじ

御多うぐはとそ下り人衆を先り望まれんぞ御ま
 さびり、由由候ありきや程小休寄もさうさびれ
 せきり仲直もさう作さうあり候なりてまご飛の
 わごさりきれど仰う若それごとく候小休一
 その而末とめまはれわと候くくあてらせぬ仲直の
 ばりきれば候きやうまうひくも何事まが候
 非遠候ませいある候なりてはりくも仰うりせや
 男く候くくさくくまのせやや作きき候がむ
 中くうれがゆくり候なり母の尻にあはれあつさ
 ごとくうぐはひさりの候程よわわわあふは候

の女れとごつ候つごりくつをばくまきこれ候に
 あはれとあやせとくやてくきくを候分よこれ
 候まきまき人のまおの候のまのくの中ま
 候はつとくまの斗まてしありてさつれをれがと
 脚とひれまきまのあはれ候くくあはれまき
 ちうとく程はつたりりまきくくあてうらま
 くあはれりくわこあまひひうぬ程ありされバ
 層のの形はあはれ候まきうりまわくくま
 うまわれんぞおこのまよなりあんとあくまは候

あまがゆきう瓜のさあ人たりと一酒のこぼるるこ
ふとそまひまうせとそひまう時のさうあふれ
ふ海んぐおきくゆいぐおるんとあふれよび
術わざ実まことぐりせれおえ事をつあぐつらうてくまぬ
の幸さいひあをせまひら程ほどま耐たけよぬぬの酒さけを
知しくの酒さけをさる程ほどまはぬ人と具ぐよ入いくあふり
うさうま三さん酒しゆとそをたはゆり一巻まきの酒さけとそ
ふりてあひくある酒さけを酒さけとそ一巻まきとつれあ
ひたれあやまうとそとさつたあぐとそと見みれがぬり
酒さけの酒さけくく阿あとそまがじとあふりさる一巻まきあふり

古今卷十六

目めのハセあれどと耐たまの佳よ人のつあまのこま
ひさうりやんぬくぞり聖せいままぬく一たわやうりあう
つはうりておそれるぬれくまうとそおまがぬぬり
ありてばうとまてそか一佳よ人のあふおがうと佳よりの
と奏そう一まれば人あれどとそとそひまうあふり
けと天てん流りゆう人にんとそか一ぬればま厳げんま下げと作しやま
て仲なつ心こころが活いちありかよさうりかま天てん作しや実まことのあふりひ
とさやうにくとおはしありさうり人にんとそひまれとそ
のこさひたりと耐た花か蔭いんのあふりいぬとそあさ
おり一あふりまあのかまて勢せい心こころといひさる志しあり

きり派のいとあのをたにまづれころばえもわづりや海もや
は作実花葉園ハナノハなふまうく物徳モノトクしきり物すよは文徳の
ゆん時入道実もあれとて物成熱心モノナリあひよとて
まじりしきりれがわたりたをま書つてしあふれ
ふたどおぼしけがうふ程はあひまうひれをゆとよ
あひかん又しきりんのふれ秀白ヒメとてまけくゆれと
きれが真ま津もれいたくゆあや

有り花とて教心山とて吉原紅とてまれのわろト

のあまうりせけひくのみだれ秀白とて感し結なれや
ゆいしくあまよきりりくのわはは熱心ヒメのあわれ

古今卷十六

〇又年二

ておろりきりばむつさくくわとえがり飯のあごもた
ゆわくされが教心がまうりきりばはけりうてせあふ
みちよいらそろ失とるあふくしく仲心ヒメやうはた
同まもんせけをくゆまえとま書ふおぬまごび下
白とてそけけゆめとて

まよりくサビツトモノ五幸三臣

友いよとくわがけけきり世の人とてあのおごりはくそ
まきりゆとて切とまえをれあもそりばおれとて
あまれとるけよまごけくれふきりまなん

後儀ヒメの由耐ヒメ急山ヒメ後市ヒメの江ヒメ念ヒメ相ヒメ成ヒメ

けと業性法眼と云ひりりり。の初善あてををある
 悉く業の宿不ひつひのせよてををればわさゆか
 よりあひくわをひくるに業毎に業性がまうへりゆひ
 するやうんがをひくると少能ひやえして口をへた
 して業性法眼めやまをくやをたあひくひく縁を
 のがりせれば業性よりとあつて業の中心より業の
 もあやまをひくるとそのひくるとを後よりあひく縁
 縁業ををくけるともや初善も初縁業や八徳をぶこ
 人の利にまてまをる中んの業性法眼へあひくひく
 尼とくくひておくりきり同家のまをくるとまをる
 不あはとて中一のとをくくぞをあひたるはるは
 ちてかたる耐ハひる中よもあつたうさあけて言守
 くのの中佛殿よりてまをるとひひく尼がりせえ
 のやとひせれば尼たりとあつてまをるとまをひて
 三の空面のの中堂の戸ひくるとまをるとひひく
 中の間へ引合せてとてえとるるとをひく縁のよと
 権は漏剋將士季親といふ者をさり周易は將士
 ちくも道ふをひくるとをひく縁のよとをひく
 中のえあひるをりある又季のまをひの度ふのぞをさ
 きたる上のまをひわるとをひくるとまをひるをひく

ひこの儒ぶのよきるがそはあつりありとるん

閑ま後のち来き容よう

くよるとそいしていひたりきればま季き親ちん

會かい法ほう先せん達だつ儒ぶ

とぞ付つたりとるの儒ぶのゆのゆりありとるそも

利りのさうりやうあり

なほ縁ゆかり何なに空くう梨りとや一人ひとり何なにゆれをい迷まるるをん慈じ

五ご善ぜん信しんとん盡じん乃の因いん念ねんのん人ひととり一いつ不ふ實じつ利りはや

しうりする成なり信しんあわつりきと後のちていさとん派はりてき起おこ信しん文ぶん

と書かく三さん語ごはい披ひ流りゅうせきとりをい伺うるん云ん

古今ここん卷まき十六じゅうろく ○六十むそ四し

若も謂い論ろん被か戒かい無む慙ぜん之の僧そう住ぢゆう持ぢ天てん台たい座ざ

主しゅ者しゃ恐おそ貽い狐こ疑ぎ於を先せん賢けん方ほう致ぢ狼ろう籍せき於を

後のち輩はい者しゃ欽きん固こ茲こゝ今いま對たい三さん寶ほう披ひ陳ちん此こゝ事こと

持ぢ律りつのん人ひとよそくく律りつとり付つけけびびららととてて言いひ

ありとときき心こゝろとと起おこ信しんのん存ぞんりりままれれららう

古今ここん著しやく因いん集しやく卷まき之の十六じゅうろく終しゆう

大日本國郡全圖

彩色摺
箱入

全二冊

此六十余州の全圖ハ一六八〇年經國の大業小志ある人をして地の理を知り
たり或ハ遊歴の客廻國順拜の人々勝蹟古跡を探り神社佛閣をめぐりて
尋ふ必用の書小比年東籟翁の撰小比年志海内小公小せん
を計り累年の工夫を以て終小大成あり其各國の郡縣村落山
河小以て中心畫く着色を以て分ち一覽する小易く其分明なる事
恰も暗中小燭を得たり小掌中を照らすごとく詳小く乾坤を知
事眼下り歴然とく小寔小こと一奇書ありかの仙家縮地の
術も是れ及さるべき死戸を出せとく天下を去るといへる古
語も嘗て此冊子の為小以てある也

書肆

尾州名古屋本町通七丁目
江戸日本橋通本銀町二丁目

同 永樂屋東四郎
出店